

二つの言語、広がる世界

マイク・ポストウィック

加藤学園

この講演では限られた時間の中で次の3つのことを述べたい。

- 1) 日本の見地からだけでなく、グローバルな視点からバイリンガルについて客観的に見て、イマージョンについての知識を簡単に話す。原則として、皆さんが明日から学んでいくことの土台を築き、言語教育やバイリンガル教育に関する思考を刺激、また挑戦を導きたい。
- 2) 本校のイマージョンプログラムの簡単な概略を示す。本日の学校参観で様々な授業を見てきたと思われる。この講演では、プログラムがどのように企画されているか「全体像」を見ていただきたい。
- 3) 講演の最後にプログラムについての質問を受け付ける時間をもうける。

私の講演のタイトルは「二つの言語、広がる世界」であり、まず「正しい」か「正しくないか」で答えていただく4つの問題から始めたいと思う。

次のうち正しいものはどれか。

1. 世界には、モノリンガルよりバイリンガルやマルチリンガルの人口のほうが多い。モノリンガルは世界人口の少数派に属する。
2. 世界人口の3人に2人は2つ以上の言語を話せるよう教育を受けている。
3. 第1言語のみで教育を受けている人口より、第2言語または外国語を通して教育を受けている人口のほうが多い。
4. 10億人以上の人が英語を第2言語あるいは外国語として学んでいる。

お気づきのとおりこれらの問題に対する答えはすべて「正しい」である。

人間はバイリンガルまたはマルチリンガルになる能力を生まれつき持っている。

国際的な研究によると、世界にはモノリンガルよりバイリンガルやマルチリンガルの人口のほうが多い (Crystal, 1997)。そのため、1つの言語しか話すことができないということは、世界人口の少数派に属することになる。さらに、第1言語だけで教育を受けている子どもたちより、少なくとも教育の一部を第2言語または、外国語で受けている子どもの方が多い (Dutcher, 1994; Tucker, 1999)。世界の多くの地域では、バイリンガルやマルチリンガルになることが日常的になっている。世界中の様々な背景において行われた

主要な長期的研究によると、明らかに多言語を獲得するのは可能であり、多くの国の教育者や政策立案者、保護者たちによって支持されている (Tucker 1999)。

一般的にモノリンガル社会に属している人々は、世界中のマルチリンガリズムの現状に驚く。Crystal (1997) は、ルクセンブルグでは、みんながルクセンブルグ語、ドイツ語、フランス語、英語を話すことができるという例を挙げている。このような背景には母親の第1言語がフランス語で、学校の友だちは英語、精肉店の店主はドイツ語、祖母はルクセンブルグ語を話すということがある。このような環境で育った子どもは、混乱することなく容易にこれらの言語をそれぞれの人に話すことができるのである。さらに、新しい外国語を学び始めるとき、容易に習得できるのである。

インドでもまた、100から200ほどの言語が使用されていることが知られている。多くのインド人が5から10の言語を聞き、話し、理解することができる。

イマージョンについては過去40年間熱心に研究され、多くのことがわかってきている。しかし、ここ日本ではいまだにイマージョンは全く新しく、極端な言語教育アプローチだと考えられている。多くの日本人にとっては、イマージョンについて考えること自体が困難であり、不可能だと当然のように思われている。今日の参観で、日本においてイマージョンが可能であるということを確認していただけたと思う。

俗説：第1言語が確立する前に外国語を学びはじめることにより、子どもたちの第1言語の発達に妨げられる。

幼児期に2つ以上の言語を学ぶことは、言語障害や言語発達遅滞の原因にはならない。

幼児が第1言語を確立する前に、第2言語を取り入れ始めてはいけないと忠告する「専門家」が残念ながら多数存在する。2つ以上の言語を耳にすることによって、子どもが混乱し、第1言語の発達に深刻な問題が引き起こされるといわれることがある。

残念ながらこのような主張は個人的な意見でしかなく、実証的な証拠によって裏打ちされたものではない。加算的バイリンガル環境において、2つ以上の言語を学ぶことが言語獲得障害や遅滞につながるということを示す証拠はない。あまりに多くの「専門家」たちが、負の学習環境において行なった早期言語教育についての調査を結論として一般化している。これは、全く異質なものであるりんごとみかんを比べるようなものである。

加算的バイリンガリズム (Additive Bilingualism)

過去20年にわたって展開してきた偉大な明察や概念の1つは、加算的バイリンガリズムという概念である。Fred Genesee は、加算的バイリンガリズムを「母国語や自国の文化を犠牲にしない第2、第3言語の獲得」と定義付けている。加算的バイリンガル環境は、第1言語を失うことなしに、2つ以上の言語の習得を促進する。これは、母国 (第1) 言語を失うことを特徴とする「減算的バイリンガリズム (Subtractive Bilingualism)」と対照的である。減算的バイリンガル環境の例としては、日本人の子どもがほとんど日本語にふれることなく外国に住むことが挙げられる。このような背景において、多数派言語 (例えば、地域社会の大多数が話す言語) が日本語ではない場所では、子どもが第1言語 (日本語) を失ってしまう可能性が非常に高い。加算的バイリンガル環

境の例としては、日本に住み（日本語や日本の文化に囲まれて）、毎日数時間他の言語を学ぶ環境が挙げられる。このような背景では、多数派言語は日本語であり、そのため第1言語を失う危険性もなく、他の言語を加算的に学習することができる。

第2言語学習やバイリンガリズムについてわかっていることの1つは、子どもたちは2つ以上の言語を学習することに対してとてつもない可能性を持っているということである。バイリンガルやマルチリンガルになる才能は、少数のエリートのものだけではない。まだ小さい子どもは、バイリンガルになる可能性を持っている。そのため、このことはバイリンガル教育において焦点にはならない。問題は、子どもたちがバイリンガルになることができるかではなく、どの条件下で最も効果が引き出せるかである。そのため、教育者または、保護者として私たちが直面する障害や難問は、生得的な能力を引き出せるような学習環境をどのように作り出すかである。幸運にも、バイリンガリズムやマルチリンガリズムを発達させる最善の条件を創造するために、今まで得てきた知識を利用することができる。プログラムを始めたり、または、構築しようと考えている人が参考にしたり、日本または海外の国々で何が行なわれているか、そして何が成功を導き、自分のプログラムの目標に何があるのかなどを見るためには外国語教育の効果的なモデルを利用することができる。加算的バイリンガリズムのこの概念は、イマージョンモデルの中心であり、成功には必要不可欠である。

バイリンガル教育の可能性と重要性を信じる。

これは特に、イマージョンにおいて当てはまることである。子どもたちの可能性を過小評価してしまうことは多々あり、教育者として生徒や自分たちの可能性に期待を抱くことが必要である。

日本やアメリカのようにモノリンガリズムに「苦しんでいる」私たちにとって、実際にその重要性や可能性を納得する必要がある。バイリンガリズムやマルチリンガリズムが日常生活を送る上で必要であるような地域では状況が違っている。しかし、ここ日本では、皆さんが加算的バイリンガリズムの可能性や重要性、また子どもたちには成し遂げる可能性があるかと心から信じる必要がある。加算的バイリンガリズムを促すようなプログラムは、子どもたちの第1言語の発達も保護し、2つ以上の言語を獲得する最高の機会を与えることができることがわかっている。また、人間の脳はこのことを成し遂げる可能性が備わっており、良いイマージョンプログラムでは、子どもたちの第1言語が失われることはないのである。

本校でイマージョンプログラムをはじめるときは、果たして成功できるのか、そして、この「前代未聞の」プログラムに参加する子どもたちは集まるのかなどの不安や懸念で一杯だった。学園長の加藤正秀博士やプログラムに関係する人々に、「やってみよう。結果はついてくる。」（映画「Field of Dreams」よりの引用）と言った「言葉」を今でも覚えている。現在、プログラムには、560名の子どもたちが在籍している。私たちが始めたことに、子どもたちがついてきたのである。

（良くも悪くも）英語は、グローバル化が進む世界の国際語になっている。

世界人口の5人に1人が適切な英語を話し、今後数年間で、英語を第2言語として話す人の数が、英語を母国語とする人の数を上回る。言語学者のDavid Crystalは、英語を*the global language*と格付けしている。彼は、世界人口の30%は、「ある程度」の英語力を持ち、約10億人が、英語を学んでいると概算している。2001年に行なわれた調査によると、ヨーロッパ人が母国語のほかに最も役立つと思う言語を聞かれたとき、回答者の75%が英語と答えた。

他の調査によると、今日、科学や科学技術、学術的な発表の80%以上は、英語で行なわれている。多くの国々では、英語の知識が労働市場のかけがえのない貴重な資材となっている。日本の日産のような多国籍企業では、企業言語として英語を使用している。英語は、「グローバル・ビレッジ」における国際語への機能的な必要性を実現しているのである。

第2、第3言語を習得する機会がより少ない「モノリンガル」の国々では、学校が非常に重要な役割を担う。

ヨーロッパや他の多くの地域では、第2、第3外国語を自然に学ぶことができる機会に恵まれている。残念ながら日本の状況は違う。このため、子どもたちの外国語力の育成に学校が非常に重要な役割を担っているのである。私たちの目標は単なるバイリンガルではなく、読み書きのできるバイリンガルになることを含んでいる。私自身が学生だったころ、コミュニケーションの場は主に地域行事だった。現在、グローバル・ビレッジは、現実のものとしてあり、コミュニケーションの方法も変わってきている。私たちは地域だけではなく、地球規模でコミュニケーションをしている。私たちが本当に子どもたちをこのグローバル・ビレッジへ向けて準備をさせるつもりなら、子どもたちが、他の言語でコミュニケーションをし、他の文化や考え方を尊重できるようにすることが求められる。

「イマージョン」とは何か。

イマージョンは、外国語を習得する上で最も有効な方法となっている。イマージョンとは、「小学校や中学校レベルで、外国語を使って一般教科の最低50%を学習するプログラムである」（Fred Genesee）。

イマージョン教育は、内容重視の（content-based）外国語教育の一種である。外国語は、授業として教えられるのではなく、コミュニケーションの手段として使われる。加藤学園の場合、英語は教科として教えるのではなく、学校の教育課程を教える手段として用いられている。本校の教育課程は実際的で意義深いコミュニケーションへの興味を喚起するものである。

様々な違ったプログラム形態

イマージョン教育の主な目的は、第1言語や他の教科の学力に悪影響を与えることなく、子どもたちに外国語の機能的言語力を提供することである。先程挙げたように、イマージョン教育の目的は、子どもたち自身の社会心理学的な幸福感や文化的アイデンティティーを失うことなく、学習する言語とそれを取り巻く環境に対して、好意的な態度や文化的な感受性を育てることである。イマージョンは、多数派言語を話している子どもを対象に行なわれることが最も多い。

トータル（全面）イマージョン

トータル・イマージョンでは、教授の100%を第2言語で行なうことから始め、小学校の終わりまでにその率を約50-80%までに減少させていく。早期トータル・イマージョンでは小学校2、3年生まで第1言語での読み書きは始めない。トータル・イマージョンの子どもたちは通常、第1言語で読むより先に第2言語で読むことを学ぶ。

パーシャル（部分）イマージョン

このプログラムでは、授業の少なくとも50%を第2言語を用いて教授する。この割合は通常小学校から中学校の前半を通して一定である。第2言語で教える教科や第1言語で教える教科はその学校が選択する。

早期イマージョン

早期イマージョンは幼稚園または小学1年生で始め、高校まで続ける場合もある。早期トータル・イマージョンでは、最初の2、3年間は授業の100%を外国語で行い、中学校までにその割合を40-80%まで徐々に下げていく。

遅延または、中期イマージョン

遅延イマージョンは多くは小学4、5年生（9-10歳）で始める。このようなプログラムでは、小学校の中学年まで教授の手段として第2言語を使用しない。それゆえ、遅延イマージョンプログラムの子どもたちは、第1言語による読み書きをまず学ぶ。このようなプログラムの多くでは、イマージョンを実施する前に対象言語でのFLES（初等外国語教育）を実施している。

後期イマージョン

後期イマージョンプログラムは、小学6、中学1年生（通常、中学校の始め）になるまで、対象言語の集中的な使用を遅らせるもので、大抵の場合は小学校の終わりに少なくとも1、2年間のFLESを受ける。後期イマージョンでは、授業の多くを外国語で行う。トータルまたはほぼトータル・イマージョンは、概して1、2年間続き、プログラムを卒業するまでの間に外国語での教授率が少なくなっていく。

加藤学園における実践

加藤学園の英語イマージョンプログラムは、幼稚園（3歳）から始まる。幼稚園を終えた子どもたちは、初等学校イマージョンプログラムへの進学を希望することができる。毎年、約50人の園児がプログラムを修了している。スペースに限りがあるため、初等学校

では40人の児童を受け入れている。そのため約30名（大体60%）が幼稚園から、残りの10名は加藤学園幼稚園以外のところから入学する。

子どもたちには6年生の終わりにいくつかの選択肢がある：イマージョンプログラムを続ける（中・高等学校でバイリンガルプログラムに在籍する）；「コア」コース（基礎基本の習得を目指す）に移る；「アルファ」コース（難関大学進学を目指す）に移る；または他の学校に進学する。初等学校イマージョン児童の約60-65%が、中学バイリンガルコースに進学する。

中学校卒業時では、高校バイリンガルコースに進学したり、コアコースに進学したり、加藤学園暁秀高校以外の学校に進学したりする。半数または3分の1の生徒が高校までバイリンガルコースを継続する。高校までバイリンガルコースを続けた生徒の半数は、日本国内の大学を選択し、残りの半数は海外の大学に進学している。

幼稚園、初等学校、中・高等学校のそれぞれの学校には、イマージョンコースとレギュラー（コア）コースがある。子どもたちはどちらかのプログラムを選択し、幼稚園や初等学校、中学校の在学途中でコースの転換をしないことになっている。

イマージョンプログラムの目標：

プログラムの目標は、日本人の子どもが機能的な英語能力をつけ、さらに日本人としての文化的アイデンティティーを失うことなく、優れた日本語能力を有することである。イマージョンプログラムには、5つの主要な基本目標がある。

- 1) 機能的な英語力を獲得する。
- 2) 教科内容を充分習得する。
- 3) 第1言語能力を維持、発達させ続ける。
- 4) 自国の文化への認識を妨げることなく、他の言語や文化への理解や認識を深める。
- 5) 至誠、創造、奉仕という個人的資質を育てる。

加藤学園イマージョンプログラムの特質

加藤学園イマージョンプログラムには、いくつかの言及すべき特質がある。

本コースで使われている文部科学省認可の教科書の多くは、英語に翻訳されている。小学校の段階では、いくつかの分野の社会科に加えて、算数や理科のすべてがこれに含まれる。中学校では、数学や理科、地理、経済の教科書が英語に翻訳されている。

加藤学園は二重認可を受けている学校である。文部科学省から認可を受けた日本の学校である。また、2000年には、国際バカロレア機構（IBO）からミドル・イヤーズ・プログラムとディプロマ・プログラム実施の承認を受けている。本校高校バイリンガルコース修了者は全員高校卒業証書を手にし、IB試験に合格した生徒は国際バカロレア機構のディプロマを取得する。加藤学園はIBOから認可を受けた日本で最初の1条校である。

最近のプログラム評価のまとめ

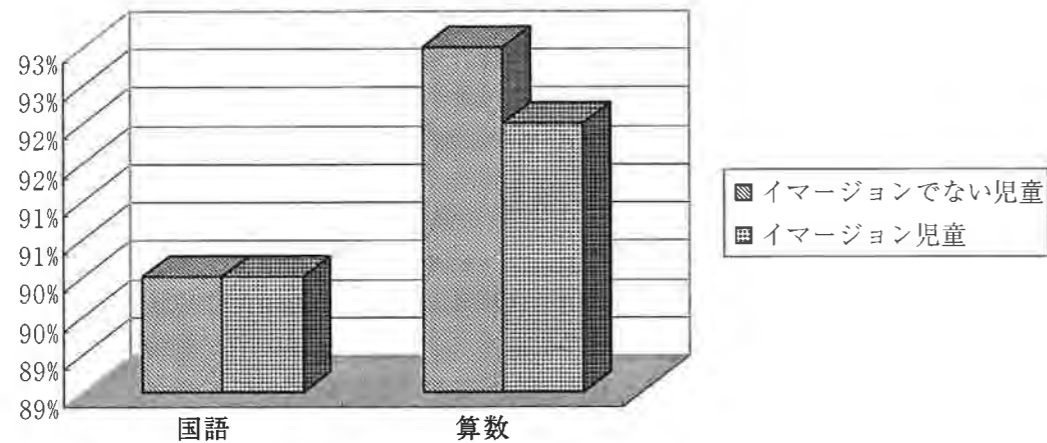
英語能力だけでなく、第1言語（日本語）能力の発達、学力、文化的アイデンティティについても、公式または非公式の評価を継続して行なっている(Bostwick 2001)。主要な論点に関する最近のデータをいくつか紹介したいと思う。

イマージョンプログラムの子どもたちの理解度を知るために、日本の他の子どもや加藤学園の他コースの子どもと比較してどの程度定着しているかを見る。比較が公平であることを確かめるため、子どもたちの社会経済的地位や、放課後学習（塾、通信教育、家庭教師など）、IQを調べた。これら3つの変数の分析によると、イマージョンと比較対象であるイマージョン以外の子どもたちの背景は非常に類似している。

日本語能力と学力

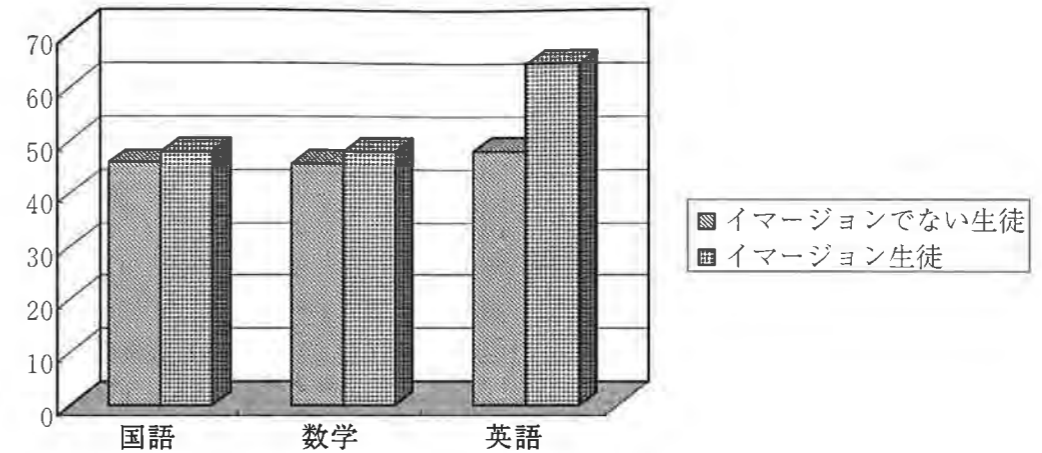
子どもたちの日本語能力の発達状況を分析したところ、多くの時間を外国語（英語）を使用して学んでいるにも関わらず、イマージョン児童は、イマージョンでない児童と同じような発達を示している。次のデータは、国語と他の教科における到達度を示している。グラフ1は、1年生から6年生の静岡県テストの国語と算数の結果を表している。小学校段階で、国語力と算数理解力におけるイマージョンとイマージョンでない子どもとの間の統計的な著しい違いは見られない。（数字は、テストでの正答率を示している。）

グラフ1：静岡県小学校テスト結果（1-6年生）



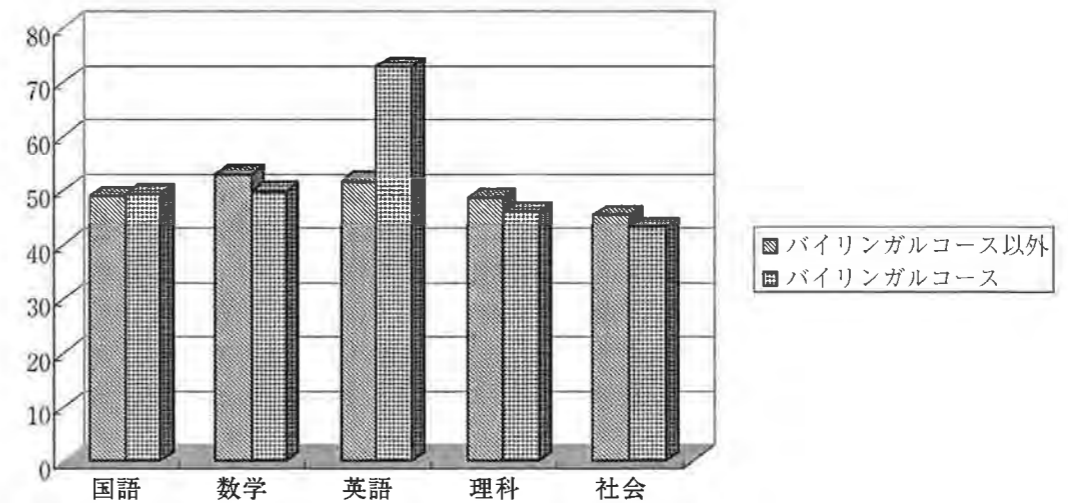
中学レベルでは、国語と数学、英語の3教科を分析項目とした。簡潔にするため、各学年（中学1年から3年）の点数を合わせて分析した。外部テストによると、国語や数学では引き続き、イマージョンとイマージョンでない子どもとの違いは見られなかったが、英語能力には大きな相違点が見られた。点数は、tスコアで表されている。（このテストを受けている基準グループの平均は50であり、10ポイントは1標準偏差に匹敵する。）

グラフ2：中学校外部テスト結果（中学1-3年生）



高校段階では5教科において評価した。前述のグラフのように高校1年から3年までのデータを組み合わせた。中学校レベルで見られたのと基本的に同様な傾向が見られた。この「イマージョンでない生徒」には、コアコースやアルファコースの生徒を含んでいる。5教科中4教科では、イマージョンとイマージョンでない生徒との間に大きな違いは見られなかった。イマージョン生徒が著しく高い点数を獲得した英語は別である。

グラフ3：高校テスト結果（高校1-3年生）



イマージョンに在籍する子どもたちの英語能力は、英検やTOEFLなどのように違った形で表すことができる。図1は、様々な級の英検（1級が最上級である。）取得者の生徒数

を示している。英検結果によると、イマージョンプログラムの子どもたちの驚くべき結果が見られる。

図1：英語イマージョンプログラム児童・生徒の英検結果

	5	4	3	Pre-2	2	Pre-1	1	Total # of Eiken students	Total # students in class
Grade 12					8	12	0	20	22
Grade 11					6	6	2	14	14
Grade 10					12	1	1	14	17
Grade 9					7	0	3	10	12
Grade 8			1	5	20	1		27	28
Grade 7		1	0	11	13	2		27	27
Grade 6		5	15	16	8			44	44
Grade 5		3	11	17	8			39	48
Grade 4		5	6	7	2			20	57
Grade 3	1	4	9	3				16	36
Grade 2	2	2	5	4				13	41
Grade 1								0	0

高校1年生から3年生はコンピュータを利用したTOEFLを受験する。最高得点は300点であり、220点（従来のTOEFLの550点に匹敵）が北アメリカのほとんどの大学で「入学許可」条件となる。

図2：TOEFLテスト結果 — 英語イマージョンプログラムの生徒のクラス平均

学年	クラス平均
Grade 10 (高1)	199 (530)
Grade 11 (高2)	209 (545)
Grade 12 (高3)	218 (557)

一般的に英語イマージョンプログラムに在籍している児童、生徒には、高レベルのリスニング理解力、機能的な会話能力、そして、必ずしもネイティブ並みとまでは言えないが、発音の良さが見られる。比較的高レベルの習熟度が見られるが、イマージョンプログラムの子どもたちには、時制や動詞の一致、前置詞において、共有の文法的間違いをしやすいという傾向が見られる。またネイティブスピーカーと比べて、オーラルの語彙が限られており、言語のイディオム使用が少ないということが見られる。

日本人としてのアイデンティティー

集中的に英語や外国人教師に接することによって、生徒の日本人としてのアイデンティティーが脅かされると心配している日本人は多くいる。Simon Downes (2001)はこの問題を調べようと調査を行なっている。

彼の調査によると、英語や外国人と接することは違う思考をより受け入れやすくするが、日本人としての基本的なアイデンティティーを失うほどではない。皮肉にもイマージョン児童、生徒はイマージョンでない子どもたちに比べて、日本文化に関してより深い知識と認識の双方を獲得している。調査結果の詳細を述べる時間はないが、次の文章で彼の調査を結びたいと思う。「・・・イマージョンの経験は、他の文化に対して好意的な態度を促進するだけでなく、自分の文化に対して高いアイデンティティーを育成している。」

日本や世界におけるイマージョン教育の実践からわかったこと。

我々のプログラムでの結果は、北アメリカで実践されたイマージョンプログラムの評価結果と酷似している。結論を次のようにまとめることができる。

- 1) 日本語能力の発達に否定的な影響は出ていない。
- 2) 学業成績に否定的な影響は出ていない。
- 3) 日本人としての強いアイデンティティーを維持している。
- 4) 多くのイマージョン生徒は、英語や他の文化に対してたいへん肯定的な姿勢を示している。
- 5) 生徒たちは異常なストレスを感じることなく、プログラムに対して肯定的な態度を示している。
- 6) 保護者はプログラムを強く支持していると同時に、プログラムに高い期待を寄せている。
- 7) 生徒は英語力を高レベルまで発達させることができているが、ネイティブスピーカーレベルには達していない。
- 8) イマージョンを成功に導くことは非常に難しい。

以上のことをもとに、次のような2つの結論を導くことができる。

内容重視の(Content-based) 外国語教育は、従来の外国語教育より効果的である。

イマージョンの実践から学んだ最も一般的なこととして、教科の学習内容や他の内容を教えていく上で第2言語を取り入れていくことは、第2言語を孤立して教えるより、効果的な言語教育方法であることが挙げられる。内容重視の外国語教育は、言語を意味ある背景で導入するため、効果的であることがわかっている。言語は勉強する教科ではなく、実践に即したコミュニケーション目的のために使用する道具である。研究によると、言語と教科内容を統合することは、従来の形の言語教育より高レベルの言語能力を促進するとたびたび証明されている。

内容教授が必ずしも良い言語教育になるということではない。

Merrill Swain は、上述の見解を示した最初の研究者である。我々は内容重視(Content-based)の外国語教育を何年にもわたって理解し展開してきたが、同時にこの外国語教育

が必ずしも、また自動的に最良の外国語教育になるわけではないとわかってきた。言い替えると、内容重視の外国語教育、または、イマージョンはそれ自身だけでは言語教育の成功を意味するものではない。言語教育の成功には、理解可能なインプット (Comprehensible Input) 以上のものが必要があるということがわかっている。外国語を通してカリキュラムの内容を教える以上のことである。イマージョンプログラムの成功は、外国語で教科内容を教えるから達成できるものではない。他の要因とともに、言語と内容を統合する効果的な言語イマージョンプログラムプランや、教師や生徒が言語の顕著に表れない、または、より難しい側面に気づくよう組織的に援助すること、言語を発する機会 (スピーキングでも、ライティングでも) を多く提供すること、そして、一貫して秩序立てられた補正フィードバックを生徒に与えることが必要である。

つまり、イマージョンはこのようにして効果的に展開できるのである。細部にこだわることによって、子どもたちをこの挑戦に導くことができる。「多くの人が話すとき、世界は、より豊かな場所になり、そして、すべてが聞かれるならば、それはより平和な場所になるだろう。」(Vincent Buck)といわれるように、このプログラムの挑戦に立ち向かう一人一人の意欲次第である。対話をし、考えるための2つの言語を提供することによって、子どもたちが縮小し続けるグローバル・ビレッジの中で、個人的にも専門的にも、より広い世界や、数え切れない機会に出会えることができるよう願っている。

参考文献

- Bostwick, M. (2001). English Language Immersion in a Japanese School. In D. Christian & F. Genesee (eds.), *Bilingual Education*. Alexandria: TESOL
- Crystal, D. (1997) *English as a Global Language*. Cambridge University Press.
- Downes, S. (2001). Sense of Japanese cultural identity within an English partial immersion programme: Should parents worry? *International Journal of Bilingual Education and Bilingualism*. Vol.4,3; pp. 165-180.
- Dutcher, N., in collaboration with Tucker, G.R. (1994). *The use of first and second languages in education: A review of educational experience*. Washington, DC: World Bank, East Asia and the Pacific Region, Country Department III
- Genesee, F. (1987). *Learning through two languages* (1st ed.). Cambridge, MA.: Newbury House (Harper & Row)
- Genesee, F. (1994). *Integrating language and content: Lessons from immersion*. Educational Practice Report 11. National Center for Research on Cultural Diversity and Second Language Learning.

Lyster, R. (1987). Speaking immersion. *The Canadian Modern Language Review*, 43,

Lyster, R. (1998). Immersion pedagogy and implications for language teaching. In J. Cenoz & F. Genesee (Eds.), *Beyond bilingualism: Multilingualism and multilingual education* (pp. 64-95). Clevedon, England: Multilingual Matters.

Met, M. "Teaching Content Through a Second Language" (1994). In Genesee, F (ed.) *Educating Second Language Children: The Whole Child, the Whole Curriculum, the Whole Community*. Cambridge University Press; pp. 167-179.

Met, M. (1999, January). *Content-based instruction: Defining terms, making decisions*. NFLC Reports. Washington, DC: The National Foreign Language Center.

Swain, M. (1996). Discovering successful second language teaching strategies and practices: From program evaluation to classroom experimentation. *Journal of Multilingual and Multicultural Development*, 17, 89-104.

Tucker, R. (1999) *A Global Perspective on Bilingualism and Bilingual Education*. CAL Digest EDO-FL-99-04

